

綾本著色《聖徳太子絵伝》第一・二面の想定復元模写研究

甘 甜（東京藝術大学大学院）

1. 研究概要

綾本著色《聖徳太子絵伝》（国宝、東京国立博物館所蔵、延久元（1069）年、以降《献納本》と称する）は法隆寺絵殿と共に長い年月の中、幾度の修理と補彩を重ね、今の姿になって現存している〔図1〕。本研究では、《献納本》の過去の修理記録や原本に残る痕跡を参考にし、絵殿に納められていた当初の姿の想定復元模写を行った。また、文献資料に残されている北宋までの絵絹加工の技法を参照しながら、綾地の加工工程の再現を試みた。

先行研究では、この《献納本》の図像と、平安時代や鎌倉時代の絵巻の類似点が指摘されている。本研究では、12世紀の後白河院政期「常盤光長様式」の作風との関連について、現存する絵巻の図像を参考にしながら、11世紀中期の説話絵である《献納本》の作風と彩色技法を考察した。

2. 《献納本》の成立と修理経緯

昭和13年から昭和18年（1938-1943）にわたる舍利殿及び絵殿の解体修理の過程で、絵殿の張付板の裏面に墨書された貴重な史料などが発見された。これらの史料と文献資料を整理し、修理歴及び史的考察をまとめると、《献納本》は現在に至るまでに7回の修理が施されたことがわかる（表1）。その中で、2回の大規模な補彩の記録が残っている。

時代	内容
延久元（1069）年	絵伝の成立と前身建物の建立
建保7（1219）年	現在絵殿の建立
建武5（1338）年8月13日～暦応2（1339）年2月17日	初回大規模修理、絵師実円による補彩
康暦2（1380）年11月	修復工賢覚房による修理
延寶3（1675）年5月	絵師佐野長兵衛、市左衛門による補彩
天明8（1788）年正月16日～3月上旬	屏風に改装
昭和43（1968）年～昭和47（1971）年	パネルに改装、岡墨光堂による修理

〈表1〉《献納本》の成立と修理・補彩経緯

3.《献納本》の図像復元

(1) 画面構成

先行研究では、《献納本》に描かれる各事績場面は年齢や地理的条件に基づいて、太子周辺の六十余の事績が適切に配置され、画面の統一が図られていることが指摘されている。

絵師である秦致貞は、四天王寺聖霊院絵堂《聖徳太子絵伝》の形式を継承しつつ、斑鳩地域の景観を制作に取り入れ¹、「入れ子構造」²という斬新な発想力を《献納本》の制作に活かしていたと考えられる。

(2) オリジナル部分と過去の補彩

《献納本》は、複数回の修理と補彩を経て、現在の姿となっている。原図に直接的な補彩が施されたことから、複数の時代の作風が混在している。現在では人物の表現に三つの時代の痕跡が混在し、現存する図像の種類も四つに分けることができた<表 2> [図 2]。

	分類	例図
1	剥落によって判明できない図像	
2	・延久元(1069)年オリジナルの図像 ・旧図像象を忠実に施した補彩	
3	・建武補彩 (1338～1339) ・旧図像に中世の作風を加えた補彩 ・部分の改変を施した加筆	
4	・延宝補彩 (1675) ・近世の作風が著しい加筆 ・織目を塗りつぶして描き直す加筆	

<表 2> 第一・二面当初の人物表現が現存する箇所を推定



[図 2] 第一・二面当初の人物表現が現存する箇所の推定

(3) 図像復元

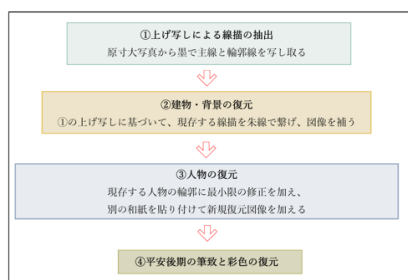
現在《献納本》に残るオリジナルの図像はごく僅かであり、また、同時代の周辺作品もほぼ現存しないため、想定復元では《献納本》にルーツを持つ現存作品の図像から情報を補い、妥当性のある復元図像を目指す必要がある [図 3]。

天明 7 (1787) 年 9 月 4 日、絵殿の壁画は《献納本》から《天明模本》に張り替えられた。江戸時代の屏風裏修理銘³によると、天明模本の図像は延久旧図を土台とし、全体の構図と人物の配置を大まかに維持して修理時の作風で改作されたものであることが分かる。細部の描写において《献納本》の図像と異なるところが多くあるが、人物の配置や動作などの基本的な情報については、今回の復元制作でも参考にできると判断した [図 4]。

¹ 秋山光和『平安時代世俗画の研究』吉川弘文館、1964 年

² 太田昌子「法隆寺絵殿本聖徳太子絵伝の語りの構造 太子絵伝研究序説」金沢美術工芸大学紀要 42、1998 年

³ 「上宮法皇畫圖五間之障子傳從延寶三乙卯曆修補至天明六丙午年百十一箇年ヲ經抑…」



〔図 3〕 画像復元方針

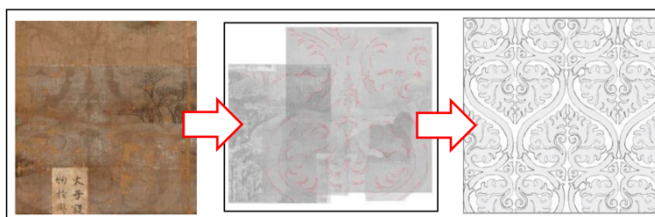


〔図 4〕 画像の復元手順イメージ

4. 支持体の復元

(1) 綾の復元

東京国立博物館の報告書には、《献納本》の下地に使用された綾についての調査が記録されている⁴。《献納本》の第二・三・五・六面の霞部分には、初期の綾と思われる文様が残存し、綾地の文様を読み取ることができる。現状から文様線を描き起こし、唐草入蓐付立涌文の図像を復元した〔図 5〕。その際、綾地の復元図及び具体的なデータを提供し、京都の織物工房である鳥居株式会社に復元を依頼した。

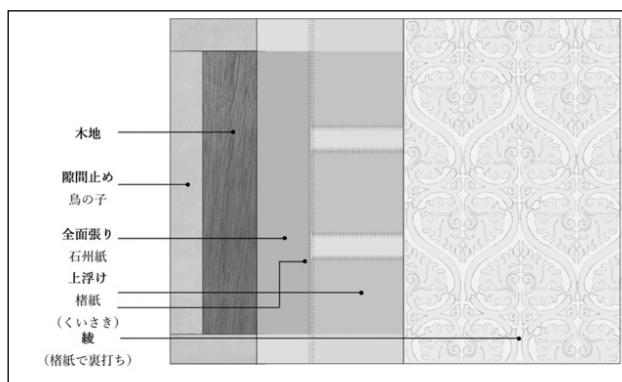


〔図 5〕 唐草入蓐付立涌文の復元

(2) 板壁と連結方法の復元

《献納本》が貼り付けられていた板壁を復元するために、昭和 16（1941）年の報告書⁵に記録された竣工横断面図と縦断面図の図版データ及び北面東側の板壁の裏面写真を参照した。板壁部分の図面と寸法が判明できる部位との比率を計算し、板壁の奥行きと裏棧の寸法を想定した〔図 6〕。

また、江戸時代に吉村周圭充貞によって制作された天明模本の調査を行い、天明模本の本紙の下に白い紙が貼られていることを確認した。



〔図 6〕 連結方法の復元

⁴ 東京国立博物館編 『法隆寺献納法物特別調査概報 28-32 聖徳太子絵伝 1-5』、2007 年-2011 年

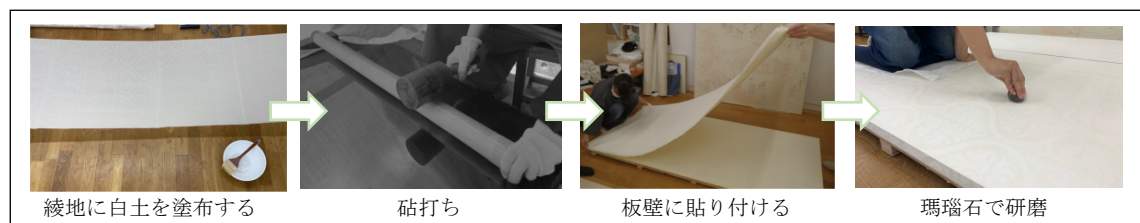
⁵ 法隆寺国宝保存事業部 『国宝建造物法隆寺東院舍利殿及絵殿並伝法堂修理工事報告書』、法隆寺国宝保存工事報告書第 8 冊、1946 年（2004 年文生書院複製版）、図版 CD-ROM

(3) 綾地加工方法の想定

本作は、平安時代後期としては珍しい綾地に描かれた巨大な障子絵である。当時は、絵絹のように安定した支持体として綾地を加工するための方法は存在しなかった。今回の想定復元では、古代の画論に残された絵絹の加工技法を参考にしながら、五代以前と南宋以降の絵絹の加工技法を整理し、絵画支持体の変革期である北宋時代の二つのパターンの絵絹加工工程を想定した〔図 7〕。

これをもとに、絵画に適した綾地を加工するための実技検証を行い、その結果、生糸に白色絵具を塗布してから砧打ちで半熟にし、さらに呉汁の塗布し、瑪瑙石で研磨することにした。この加工によって、滲みが少なく平らな綾地の上で「墨溜まり」の現象が起こることが判明した。《猷納本》は、平安時代後期の紙本絵巻と図像だけでなく、絵画技法まで類似してのかもしれない。このことは、12 世紀以前の支持体と線描の関連について一つの新たな視点を提示したものと言えよう。

また、実技を通して綾地表面の凹凸を解消するために、綾地を磨く必要があることがわかった。《猷納本》は綾地の特性に合わせるために、様々な技法を取り入れて描かれたものであると推測される。



〔図 7〕綾地加工方法の想定

5. 筆致と彩色の復元

《猷納本》に残存しているオリジナルの人物表現からは、11 世紀の人物を描き分ける手法を観察することができる。高貴な人物は均一なごく細い線描で描かれ、従者は抑揚と肥瘦のある線で描かれる。このような描写対象の身分に応じて線描の質感を変える古い表現は、線描の叙事機能を発揮し、12 世紀後半まで影響を持ち続けた。

山水背景が描かれる支持体は土壁から絵絹へと移り、《猷納本》に描かれる山水背景はその過渡期に位置づけられる。秦致貞は従来の絵画技法を綾地に適用する際、特別な工夫を凝らしたと考えられる。本研究では、彩色サンプルの制作を通じて、藤黄地色と白緑下塗りの検証、緑青の重ね塗りの実験を行った。その結果、《猷納本》の山水表現は「大青緑山水」の技法を採用し、「小青緑山水」の様式と融合させたものであると推測した。要するに、日本の青緑山水の表現は、どのような支持体に描く場合にも適応できる汎用的な様式であり、その起源を《猷納本》に窺うことができる。

6. 総括

本研究は復元模写を通じて《献納本》の図像を作成する意図を考察したものである。絵師とされる秦致貞は、10 世紀に成立した『聖徳太子伝暦』の内容に従い、描写する聖徳太子の事績を選択した。そして絵殿の位置と空間を踏まえて、事績の配置と画面全体の構図を改変した。

さらに秦致貞は四天王寺聖霊院絵堂《聖徳太子絵伝》に描かれた初期の聖徳太子絵伝の図像を継承しつつ、斑鳩地域の景観を制作に取り入れ、《献納本》を描いたものと推測した。

また、濃彩絵の支持体とする綾地の特殊な加工技法を用いたと考えられ、絵画の支持体とする綾地の加工技法の一例を示すことができた。《献納本》は精錬する前の生綾地を使用している可能性を提唱し、その綾地に濃彩を乗せる技法を解明した。

さらに、本研究では図像上の復元だけでなく、平安後期の線描表現に可能な限り近づくことを実現でき、11 世紀の大画面説話障壁画の復元図を提示することができた [図 8]。描写対象の身分や彩色方法に応じて線描の質を変える手法は、12 世紀の紙本絵巻に通じることも推察された。延久元（1069）年に成立した《献納本》は、現存する最古のやまと絵の説話画として、人物の身分を線描の質感を通じて巧みに表現する手法を用いたことを実証した。

本研究は、綾地の加工から絵画様式までの論述によって、《献納本》の位置を改めて考察してきた。《献納本》の制作工程や作風は、多様な平安時代後期の大画面障子絵や壁画の中でも特殊な作例であり、初期ややまと絵の数少ない現存例というだけではなく、極めて特徴的で類例のない作品であることが分かった。



[図 8] 博士審査展 展示風景（左）復元下図、（右）想定復元模写